

## 事例2 ドレークの航海に関する資料を活用して、航海の目的を考察する授業

### 1 ねらい

新学習指導要領において、世界史Bでは、すべての大項目に主題を設定して行う学習が置かれた。その一つとして、16世紀から19世紀までの世界の動向を扱う大項目「(4) 諸地域世界の結合と変容」には、中項目「オ 資料からよみとく歴史の世界」が置かれた。その目標は、「主題を設定し、その時代の資料を選択して、資料の内容をまとめたり、その意図やねらいを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して、資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる」とある。ここでは、この大項目で扱う内容の中から、教師が主題を設定して、その時代の資料を取り上げ、生徒にその内容や意図、ねらいなどについて多面的・多角的に考察させる活動を行うことが示されている。

これを踏まえて、本事例では「ドレークを通して見る16世紀のイギリスの海外進出」という主題を設定し、「その時代の資料」としてドレークの航海に関する資料を取り上げた。航海の目的について仮説を立て、資料の内容を読み取り、読み取ったことを基に仮説を検証したり、疑問に思ったことを調べたり、それらの結果を発表したりする学習活動を行った。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、資料の内容を読み取ったり、資料を多面的・多角的に考察できたりすることを目指した。

### 2 授業実践

#### (1)単元の指導目標

16世紀のイギリスが、スペインに対抗しながら積極的な海外進出を開始したことを、ドレークの航海に関する資料をよみとくことを通して考察させる。

#### (2)単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・16世紀のイギリスの海外進出に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・16世紀のイギリスの海外進出について、その時代の文字資料を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・16世紀のイギリスの海外進出について、その時代の文字資料から、有用な情報を読み取ったり、文章にまとめたりしている。	・16世紀のイギリスの海外進出について、スペインとの勢力関係を理解し、その知識を身に付けている。

#### (3)指導計画（3時間）

時間	学 習 活 動	評 価 計 画
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドレークの航海ルートを確認しながら、当時の国名を記入する。</li> <li>・各自で仮説を立てる。</li> </ul>	<b>【知識・理解】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリスやスペイン、明の位置や、アメリカ大陸にスペインの植民地があることを理解している。</li> </ul> <b>【関心・意欲・態度】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドレークの航海についての関心を高め、意欲的に航海の目的を考えている。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドレークの航海に関する資料を読</li> </ul>	<b>【資料活用の技能】</b>

	み、内容をまとめる。 ・資料に基づいてグループで話し合いながら仮説を立てる。	・ドレークの航海に関する資料から、ドレーク一行がスペインが支配しているアメリカ大陸で、銀などを奪ったことを読み取っている。 【思考・判断・表現】 ・グループでの話し合いを通して、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を文章で書いている。
3	・グループの仮説を発表する。 ・発表を聞いて各自で航海の目的を考え文章にまとめる。	【思考・判断・表現】 ・イギリスとスペインとの対抗関係を踏まえ、ドレークの航海の目的について考察し、表現している。

#### (4) 授業の概要

本実施校では、「世界史B」は選択科目であるので、3年生のA組とB組、合計17名の生徒に対して実践した。

##### ア 1時間目の授業

1時間目の学習活動は、ドレークやその航海に対する生徒の関心や意欲を高めることを目標の一つとした。ワークシートNo.1（資料1）にドレークの肖像画を載せ、その生涯について説明した。また、航海ルートを示す地図の作業を通して、各自で航海の目的を考察させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 3分	・「海賊」という言葉から連想することをワークシートNo.1に書く。		
展開 45分	・ドレークの肖像画を見て受けた印象をワークシートNo.1に書く。 ・ドレークの生涯に関する話を聞き、内容をワークシートNo.1に書く。 ・地図に示された、ドレークの航海ルートを確認しながら、①から④に当てはまる国名を記入する。  ・ドレークの航海の目的を二つ考え、ワークシートに書く。	・活発な発言が出るよう自由に記入させる。  ・イギリス、スペイン、明の位置やアメリカ大陸にスペインの植民地があることを確認させる。	【知識・理解】 ・イギリスやスペイン、明の位置や、アメリカ大陸にスペインの植民地があることを理解している。 〔ワークシートNo.1〕  【関心・意欲・態度】 ・ドレークの航海についての関心を高め、意欲的に航海の目的を考えている。 〔ワークシートNo.1〕
まとめ 2分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

資料 1

1 「海賊」と聞いて連想することを書こう。

2 ドレークについて  
肖像画を見ての印象は？

(肖像画)

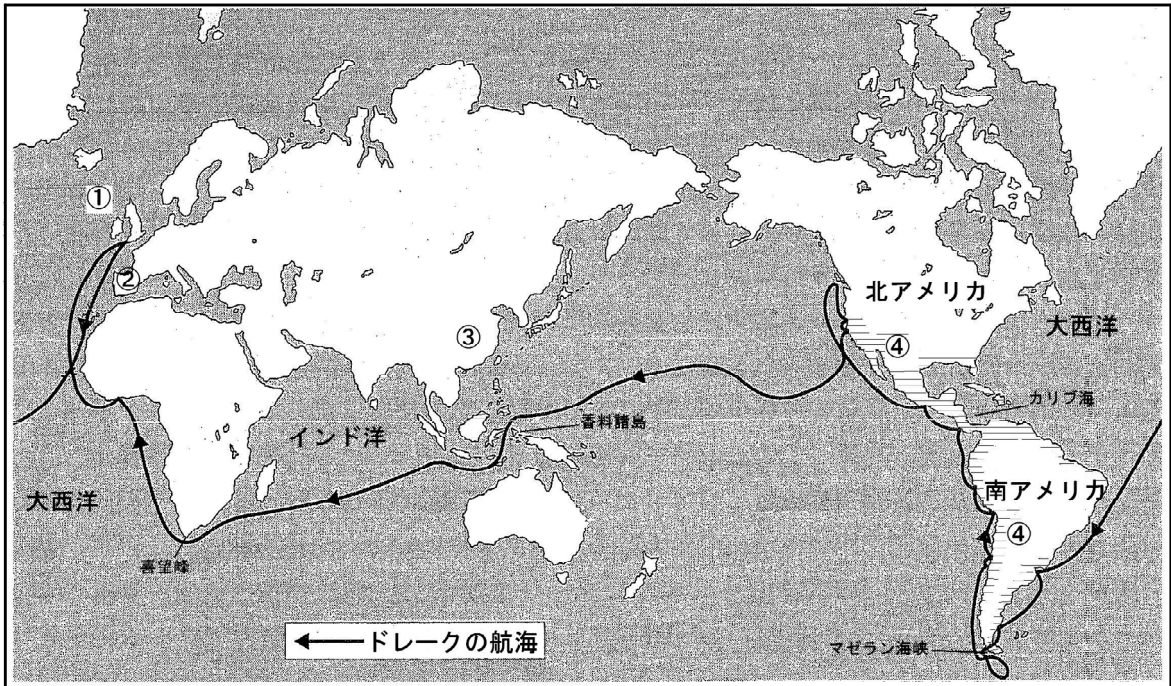
生涯について (メモを取ろう)

① 生い立ち

② 海賊になるまで

3 下の地図の①～④に当てはまる国の名称を書こう。



4 ドレークの航海の目的を2つ、各自で考えてみよう。

①

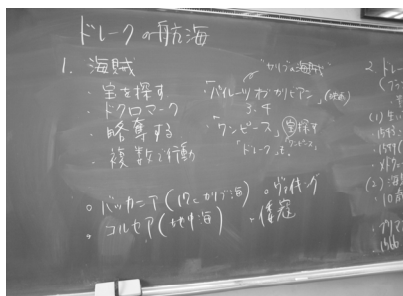
②

導入の活動は、生徒が映画の話題やアニメーションの話題を出すなどして、その後の発言しやすい雰囲気を作る上で効果があった。また、展開の最初で行った、肖像画から受ける印象を書く作業にも意欲的に取り組んでいた。ドレークの生涯に関しては、教師が以下の内容を説明した。

- ＜ドレークの生涯＞
- ・1543年ころイギリス南西部で生まれる
  - ・家は小作農家、12人兄弟
  - ・10歳のころから家計を助けるため帆船で下働き
  - ・ジョン＝ホーキンスの船団に参加
  - ・1566年から船長として各地を航海

ジョン＝ホーキンスについては、ドレークと同様、海賊であることを説明した。

続いて行った地図を使った作業は、教科書や資料集を見ながら、当てはまる国の名称を記入する生徒の様子が見られたことから、学習した知識の確認や当時の世界の状況を把握するのに効果があったと考えられる。なお地図には、ドレークの航海ルートが示されている。作業をしながら、ドレークが中南米のスペイン領沿岸に何か所も立ち寄っていることに気付くことができれば、航海の目的を考える手がかりになると考えた。



(生徒があげた「海賊」から連想すること)



(航海の目的を各自で考え文章で書く)

この時間の中心となる学習活動は、ドレークの航海の目的を二つ考えることである。生徒は、ペルー（スペイン領植民地）のポトシ銀山といった既に学習した内容や、ワークシート「ドレークの航海」No.1（資料1）の地図を活用しながら、ドレークの航海の目的を二つ考えることができると考えた。

以下は、ドレークの航海の目的について生徒が書いた文章の例である。

- ① <sup>特に</sup>スペイン領の南北アメリカの財宝を略奪しようとした。
- ② 世界の海 周辺をよく視察して、財宝をとりやすい場所を見つけ、どのルートで逃がれば捕らわれないかの見当をつけた。後継者に伝える。

- ① 途中の邪魔な国を攻撃しながら 世界一周
- ② 商売の発達した国との交易。

- ① 香辛料 <sup>東南アジア</sup> ないし 世界中の食料の獲得、土地、財宝 <sup>アメリカ</sup> も獲得するため。
- ② スペイン <sup>① 対抗</sup> に対抗するため  
① 対抗 侵略

- ① スペインを襲うため
- ② 宝を奪って金持ちになりたかった

生徒が書いたドレークの航海の目的は次の六つに分類できる。スペイン領となっている中南米の土地や財宝を奪うことやスペインとの対抗など、スペインとの関係について触れている生徒は9名いた。さらに、香辛料の獲得について触れた生徒も6名と多かった。香料諸島に注目し、大航海時代の学習で得た知識を活用した解答である。

- ・アメリカ大陸のスペイン領の土地や財宝を奪うため…6名
- ・香辛料を獲得するため…6名
- ・植民地を獲得するため…4名
- ・アメリカ大陸に進出するため…4名
- ・スペインに対抗するため…3名
- ・世界一周をするため…2名
- ・その他…7名

多くの生徒が、スペインとの関係や香辛料の獲得など、これまでの学習で得た知識を活用して文章を書くことができた。

#### イ 2時間目の授業

2時間目はグループによる活動である。2～3名のグループを六つ作らせ、ワークシート「ドレークの航海」No.2（資料2）と資料「ドレークの航海に関する資料」（資料3）を配布した。資料を読み、その内容を①資料の舞台はどこか、②ドレーク一行は何をしたかの2点についてワークシートにまとめさせた。さらに、まとめた内容を踏まえて、ドレークの航海の目的は何かについて、グループでの話し合いを通して仮説を立てさせた。話し合いの中で、生徒たちが海外進出において優位に立つスペインへの対抗や、ポトシ銀山との関連に気付くことを期待した。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 3分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・資料に関する教師の説明を聞く。	・資料の性格について、同時代のものであることと、ドレーク自身による訂正が加わ	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料を読み、ワークシートNo. 2にその内容をまとめる。</li> <li>グループで話し合いながら、ドレークの航海の目的について、仮説を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>机間指導を行い、読み取りや話し合いに行き詰まっているグループに対してヒントを与える。</li> </ul>	<p>【資料活用の技能】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ドレークの航海に関する資料から、ドレーク一行がスペインが支配しているアメリカ大陸で、銀などを奪ったことを読み取っている。 〔ワークシートNo. 2〕</li> </ul> <p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループでの話し合いを通して、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を文章で書いている。 〔ワークシートNo. 2〕</li> </ul>
まとめ 2分	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の学習内容の予告を聞く。</li> </ul>		

資料については、教師が以下の内容を説明した。

<資料について>

- 資料名：「サ・フランシス・ドレイクー再評価」
- 内容：ドレークが1572年から1573年にかけて行った航海の記録。航海に同行した船乗りたちから得た情報を編集し、ドレーク自身が大幅に訂正して成立した。ドレークの死後、1626年にイギリスで出版された。
- 前回のワークシートで示した世界周航（1577年～1580年）の4年前の航海であるが、航海の目的は同じである。

資料の出典は越智武臣、朱牟田夏雄、中野好夫『大航海時代叢書（第Ⅱ期）17 イギリスの航海と植民1』岩波書店、1983年、429頁～430頁、及び451頁～452頁である。主な内容は上述のとおりである。1572年から1573年にかけて、ドレークが行ったパナマ航海の様子を記したものである。当時パナマはスペインの植民地であり、同じスペイン領にあるペルーのポトシ銀山で産出された銀の本国への積み出し港があった。ポトシ銀山で産出された銀は、太平洋上を船で輸送され、パナマの南岸でいったん陸揚げされる。そこから驃馬（雌のウマと雄のロバの雑種）で陸路を北上し、パナマ北岸の港で本国へ向かう船に積まれたのである。ドレークは、この陸路で、銀の輸送中であつた隊列を襲撃した。

教師による説明が終わると、早速生徒は友人と話し合いをしながら、資料を読む作業を始めた。文字資料に対して抵抗を感じる生徒が多いのではないかと予想したが、どのグループでも活発な活動が行われていた。机間指導をして生徒の様子を見ると、資料の中に出てくる「金銀」、「銀」、「スペイン本国」、「パナマ」といった語句に印を付けている生徒が多く見られた。A組の2班と3班では、資料からドレーク一行の中にフランス兵がいることを読み取り、イギリスがフラン

## 資料2

ワークシート「ドレークの航海」

No. 2

3年 組 氏名

1 ドレークの航海に関する資料を読み、以下の点を調べよう

(1) 資料の舞台はどこか？

--

(2) ドレーク一行は何をしたか？

--

2 グループとしての仮説を2つ立てよう。(ドレークの航海の目的は？)

①

②

3 他のグループの発表内容をメモしよう。

--

4 他のグループの発表を評価しよう。

	評価 (A、B、C)	評価の理由
1班		
2班		
3班		

5 ドレークの航海の目的を、2つ書いてみよう。

①

②

## ドレークの航海に関する資料

というのは、パナマからベンタ・クルスへの旅は（距離は六リーグ）、通常夜間というのがつねだった。つまり、その間は終始草原地だけに、昼間は猛烈な酷暑というわけ。ところが、逆にベンタ・クルスからノンブレ・デ・ディオスまでは、これも同様陸路での運搬ではあったが、大体いつも日中ばかり、夜間のそれは行わなかった。というのは、道中は終始密林ばかり、おかげで涼しく快適だったからだ―ただ悩みの種は一つ、もしかするとシマローンたちの襲撃に遭い（事実ときにあつたのだ）、肝を冷やすこともあるからである。そんなわけで、これら搬送驛馬隊には彼等も必ず護衛隊をつけていた。

（中略）

さて、一同この森で身支度を整えると、日没前約一時間という頃、また一人スパイを送り出した。日没前には市内に潜入できようとの計算だったのだが、果してその通りやつてのけた。そしてまもなく帰って来て、運よく仲間たちに出会って知りえた情報というのを、そのまま伝えてくれた。それによれば、リマ市駐在の財務官は、スペイン本国へ帰る第一便の通報船（それは三五〇トンの実に立派な船だった）に乗船すべく、まさに今夜、娘と家族たちとを連れノンブレ・デ・ディオスに向け出発するところだという。これには一四頭の驛馬群が同行し、うち八頭には黄金を積み、一頭には宝石類が積まれているし、さらにほかにもそれぞれ五〇頭の驛馬から成る二隊の搬送隊が編成されており、大部分は糧食類が積み荷だが、中には多少の銀を積んだものもある。そしてこの二隊

も今夜、相前後して出発のはずだというのだ。

（中略）

近づく搬送隊は三隊だった。一隊は驛馬五〇頭、あとの二隊はそれぞれ七〇頭、一頭ごとに銀三〇〇ポンドは積んでいるわけだから、総計すれば三〇トン近くにはなる勘定。さっそくわれらは態勢を整え、鈴音をたよりに街道の方へと降って行った。そしてそこで待っていると、まもなくそれがなんの金属で出来ているかまでわかるほどになった。すかさずわれらは先頭と最後尾との驛馬群の頭をしつかと押さえたので、これも彼等の習性なのだが、あとの驛馬どもも歩みを止めて坐りこんでしまった。これら三隊の搬送隊には、それぞれに一五名づつ、合計四五名ほどの護衛兵がつけられていたが、そこで暫時は双方銃弾と矢とによる交戦になった。そしてこの交戦で例のフランス隊長は、霰弾を腹部に受け重傷を負うし、シマローンも一人が戦死した。だが、結局は護衛兵たちの方で、ここは驛馬群を棄てて逃げ、救援は他に求めるのが得策とでも考えたらしい。そこでその間にわれらは、特に重そうな荷を背負っていた驛馬何頭かを選び、骨は折れたがなんとか積み荷はおろした。が、とにかく疲れたので、まずはわれらで運べそうな量だけの金の延べ棒、輪など何個かを奪うことで満足した。そして残りほぼ一五トンほどの銀は、一部は巨大なオカガニの群がつくった地面の穴に、また一部はあたり一面に倒れていた老木の下に、さらに一部は川砂、川砂利の中、あまり水の深くない場所を選んで埋めた。

<出典> 中野好夫『大航海時代叢書（第Ⅱ期）17 イギリスの航海と植民1』岩波書店、1983年、429～430ページ、451～452ページ。



スと連携して、スペインに対抗しているのではないかという話題が出ていた。B組では、2班の話合いの中で、オランダ独立戦争においてイギリスとスペインが対立したことや、スペインの無敵艦隊をイギリス海軍が撃破したことなどから、その直前のドレークのパナマ遠征の時点でイギリスとスペインの対抗関係があったのではないかという推測をしていた。このように、学習した内容も踏まえながら、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を立てる活動が行われている様子が見られた。

また、資料には、「ベンタ・クルス」や「ノンブレ・デ・ディオス」といった細かい地名や、「シマローン」(逃亡した奴隷)や「騾馬」といった聞きなれない語句、さらにはスペインやフランスといった国名も出てくるため、読み取りが進まないグループもあった。机間指導をしながら、質問に答えたり、資料の読み取りのヒントを与えるなど、活動が円滑に進むよう支援した。



(資料を読む活動の様子)

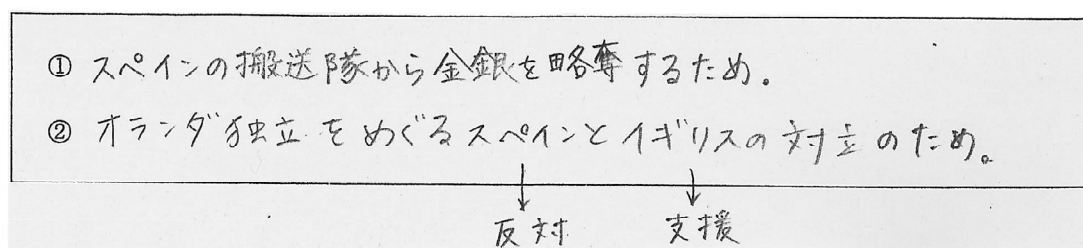


(議論して仮説を立てる)



(資料の読み取りにヒントを与える)

まとめの段階において、ワークシートNo.2の「(1) 資料の舞台はどこか?」について、パナマであることを確認した。さらに、前時に使用したワークシートNo.1にある世界地図で、パナマの位置も確認させた。授業が終了した時点で、グループの仮説の記入は、ほとんどのグループが完了していた。以下は、ワークシートNo.2に書かれた仮説の例である。3時間目の授業では、これに基づいて、発表を行った。



### ウ 3時間目の授業

3時間目は、前時の活動で立てた、ドレークの航海の目的についてのグループとしての仮説を発表させた。その発表を踏まえて、改めてドレークの航海の目的は何か、各自で文章に表現させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 3分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・ドレークの航海の目的について、グループの仮説を発表する。	・発表、板書、発表内容の確認などの役割分担をさせておく。	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表を聞き、その内容を記録する。</li> <li>・発表を評価し、その理由を書く。</li> <li>・発表された内容を踏まえて、ドレークの航海の目的について、各自の考えを文章で表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価理由を明確に書かせる。</li> </ul>	<p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリスとスペインとの対抗関係を踏まえて、ドレークの航海の目的について考察し、文章で表現している。</li> </ul> <p>[ワークシートNo.2]</p>
まとめ 2分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次時の学習内容の予告を聞く。</li> </ul>		

展開の初めでは、グループ全員に役割分担をさせて発表させた。また、発表する前にワークシートに書かれた仮説を板書することと、発表の内容をワークシートNo.2を見ながら確認するよう伝えた。発表を聞く側の生徒に対しては、発表された内容をメモに取らせ、さらに、発表に対する評価とその理由を書かせた。

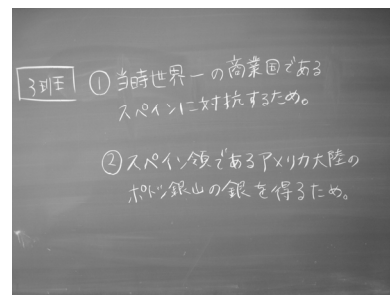
発表は一つのグループで5～6分間とした。発表の中で、仮説の根拠となった資料の該当箇所を読み上げるグループが多かった。また、発表を聞いている生徒も、内容をメモに取りながら熱心に聞いている様子が見られた。



(仮説を板書する)



(ワークシートで確認しながら発表)



(生徒による板書)

以下は、ワークシートに書かれた各グループの仮説である。

A組

< 1班 >

- ①アメリカ大陸の鉱山の金やアステカ帝国やインカ帝国などの財宝を奪うため。
- ②大航海時代に栄えていたスペインに対抗するため。

< 2班 >

- ①スペインから金銀を奪うため。
  - ②スペインの土地を奪うため。
- これらによってスペインに対抗するため。

< 3班 >

- ①スペインにやられた復讐としてスペイン船やスペインの植民地を攻撃するため。
- ②アメリカに金・銀が大量にあったから。

## B組

### < 1 班 >

- ①スペインの搬送隊から銀を奪ってイギリスの国家資金にするため。
- ②スペインの搬送隊を襲うことで、スペインの貿易を妨害して利益をもたらさないようにするため。

### < 2 班 >

- ①スペインの搬送隊から金銀を略奪するため。
- ②オランダ独立をめぐるスペインとイギリスの対立のため。

### < 3 班 >

- ①当時世界一の商業国であるスペインに対抗するため。
- ②スペイン領であるアメリカ大陸のポトシ銀山の銀を得るため。

全てのグループの仮説に、スペインとの対抗関係についての記述と、金や銀の獲得についての記述が見られる。スペインと対抗した理由については、A組の1班やB組の3班のように、スペインが海外進出においてイギリスよりも優位に立っていたことを取り上げた班と、B組の2班のように、オランダ独立戦争（1568年～1609年）をめぐるイギリスとスペインの対立を取り上げた班があった。金や銀の獲得については、B組の3班がポトシ銀山と関連付けることができた。また、ワークシートには書かれていないが、A組の3班も実際の発表の際には、ポトシ銀山との関連について触れていた。

発表に対する生徒の評価で、もっとも高い評価を受けたのはA組では、1班と2班の発表で、6名の生徒が「A」の評価を付けた。「A」を付けた理由として、生徒の書いたものの中からいくつか取り上げる。

#### < 1 班の発表にAを付けた理由 >

- ・資料集や教科書の内容を使っていて分かりやすかった。
- ・資料がよく調べてあったので、根拠や仮説に納得できた。
- ・ちゃんとまとまっていた。資料、教科書の中からその時代の背景を的確にとらえていた。

#### < 2 班の発表にAを付けた理由 >

- ・資料内容から推察を展開しているところがよかった。
- ・地図と資料を正確に読み取っていたから。
- ・資料から色々読み取っていたから。

1班は発表の際に、教科書や資料集を用いて、大航海時代以降の海外進出においてスペインの覇権が確立していたことや、アステカやインカでは金や銀の装飾具が豊富であったことなど、これまでの学習内容との関連付けを行っていた。2班は、1時間目に使用したワークシートにある地図から、ドレーク一行が中南米やフィリピンなど、当時スペインが植民地支配していた地域に多く立ち寄っていることを指摘し、それを根拠の一つとして仮説の発表を行った。

B組では、発表に対する評価が、どのグループに対しても「A」が付けられた。そうした中で、2班の発表に対しては、分かりやすいという理由が多くの子供からあげられた。2班は、A組の2班と同様、発表の際に教科書や資料集を用いて、授業で扱った内容との関連付けを行った班である。授業で扱った内容との関連付けがなされたことによって、資料に書かれている内容が、生徒の既存の知識と結びつき、分かりやすいという評価につながったものと思われる。

すべてのグループの発表が終了したあと、一連の学習で得た情報を基に、ドレークの航海の目

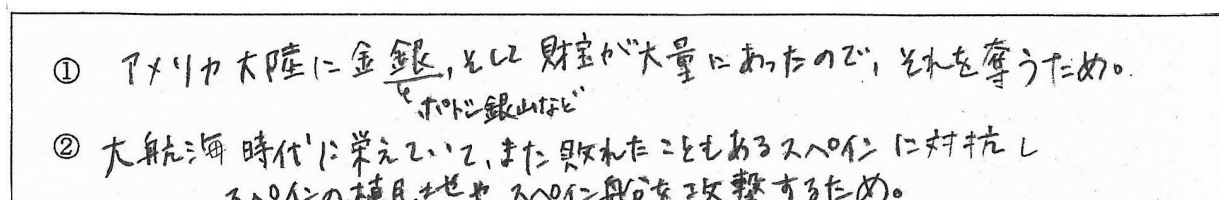
的を二つ、ワークシートNo.2の欄に各自で文章にまとめる作業を行った。生徒が書いた文章の内容をまとめると次のとおりである。

- ・アメリカ大陸のスペイン領の金や銀を奪うため …13名
- ・当時繁栄していたスペインに対抗するため …16名
- ・オランダ独立をめぐりスペインと対立していたため…2名
- ・アメリカ大陸にあるスペイン領を奪うため …1名
- ・銀を奪いスペインに利益をもたせないため …1名
- ・金銀を奪うため …1名

ほとんどの生徒が、スペイン領中南米から産出される金や銀を奪うことと、大航海時代以降繁栄していたスペインに対抗することを踏まえた文章を書いていた。また、すべての生徒が、二つの仮説のうち、いずれかにはスペインとの対抗関係やスペイン領からの銀などの獲得に触れた内容に触れていた。

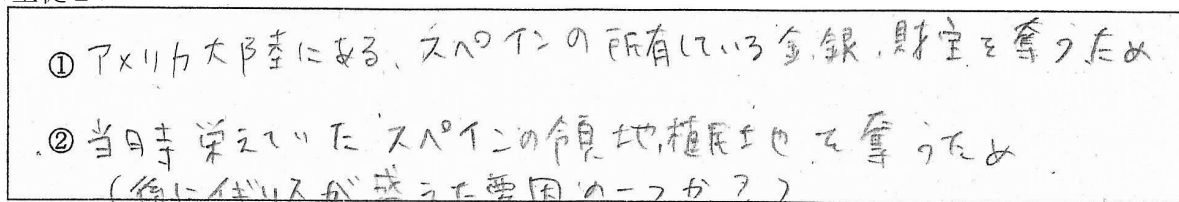
生徒が書いたものの中からいくつか、具体例を紹介する。

#### <生徒1>



上の文章を書いた<生徒1>は、「ア 1時間目の授業」の仮説では、「①スペイン領の南北アメリカの財宝を略奪しようとした。②世界の海をよく視察して、財宝をとりやすい場所を見つけ、どのルートで逃亡すれば捕まらないかなどの見当をつけた。」と書いていた。この生徒はA組の1班に所属して活動した。1班は、資料の読み取りを通して、鉱山との関連や大航海時代にスペインが覇権を確立していたことなどを仮説として立てた。しかし、鉱山についてはポトシ銀山との関連に気付くことができていなかった。しかし、上に示した①の文章を見ると、この生徒は「ポトシ銀山など」という書き込みが見られることから、3班の発表から得た情報を生かして文章を書くことができたと考えられる。

#### <生徒2>



<生徒2>もA組の1班に所属して活動した。1時間目にこの生徒が立てた仮説は、「①新大陸がどのようなものか見ること ②暖かい地方にしかないものを手に入れるため」というものであった。また、ワークシートを見ると、2時間目の資料の読み取りでは、「アメリカ大陸の鉱山の金を獲った」と書いている。しかし、1班の立てた仮説を見ると、アステカ帝国やインカ帝国について書かれているので、アメリカ大陸がスペインの植民地支配下におかれていたことが、話し合いの過程で出たことが推測される。また、同じグループに所属する生徒が1時間目に立てた仮

説の一つに、「スペインに対抗すること」とあるので、やはりグループでの話し合いの過程で、スペインとの対抗関係という情報を得られたと思われる。この生徒は、グループでの話し合いを通して有用な情報を得て、それを生かして自身の考えをまとめることができたと言える。また、この生徒は普段の授業では控え目であるが、今回の授業では、グループでの話し合いをリードしたり、3時間目には班の代表として発表したりするなど活躍した。

このように、多くの生徒が、グループでの話し合いや、他のグループの発表から得られた情報を生かして各自の考えを書くことができていた。

### 3 まとめ

#### (1) 成果

本事例では、その時代の資料としてドレークの航海に関する資料を取り上げ、資料の内容を読み取り、読み取ったことをもとに航海の目的について仮説を立てたり、発表したりした。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心・意欲を高めたり、それまでの学習で得た知識や技能を活用して、資料を多面的・多角的によみとく技能を高めたりできることを目指した。

2時間目のグループ活動の様子に見られるように、資料に関する教師の説明が終わると、早速作業に取り掛かる様子が見られたり、机間指導をする教師に積極的に質問をしてきたりするなど、生徒の関心や意欲を高めるきっかけとして、グループ活動や資料が有効であったことが分かる。グループとしての仮説を立てる過程においても、どのグループでも熱心に話し合いをしている様子が見られたことから、生徒の関心や意欲は持続していたと言える。

また、グループとしての仮説を立てる過程で、多くのグループで教科書や資料集、ノートが参照されていた。その結果、これまでの授業で得た知識の中から、資料の内容に直接関連すると思われるものを見つけ出すことができていた。生徒は、それらの知識を活用し、資料に書かれた「銀」はポトシ銀山から産出したものではないかと推測したり、フランス兵がドレーク一行に加わっているという記述を、イタリア戦争以降のスペインとフランスとの対立関係と関連付けたりするなど、資料を多面的・多角的に考察することができていた。

3時間目の最後には一連の学習で得た情報をもとに、ドレークの航海の目的を各自で文章書く作業を行った。生徒が書いた文章をみると、グループでの話し合いや、他の班の発表から得られた情報が生かされていることが読み取れた。このことから、話し合いや発表といった他者の意見を書く機会を設けたことが、それぞれの生徒が多角的な視点から自分の考えを書くことを可能にしたと言える。

#### (2) 課題

今回の事例では、2時間目に行ったグループで話し合いながら仮説を立てる活動の過程で多くの生徒が教科書や資料集、ノートを参照していた。また、3時間目のグループの発表に対する評価においても、教科書や資料集を使って、これまで学習した内容との関連を踏まえた発表に対する評価が高かった。このことから、資料を活用した活動においても、生徒が資料の内容を納得して理解したり、そこから考察を進めたりする上では、それまでに学習した内容との関連が欠かせないことが分かった。一方、資料を活用した学習では、生徒の多様な考えを引き出すことも重要であると考えられる。本事例では、2時間目に行った、グループで仮説を立てる活動の際に、生徒が教科書や資料集、ノートを参考にした結果、1時間目に個人が立てた仮説に見られた「香辛料を獲得するため」というものや「植民地を獲得するため」といった多様な意見が消えてしまった。

これらの多様な意見を、3時間目の発表の段階まで生かすことで、生徒がより多面的・多角的に考察を進めることが可能になるのではないかと考えられる。

さらに、それぞれの生徒に、各自の活動で得た成果を踏まえながら、重要な内容を理解させる活動も必要であろう。例えば、本事例の場合、1時間目の最後にドレークの航海の目的について各自が書いた文章を、2時間目の最初に紹介することが考えられる。多面的・多角的な考察が生かされていたり、重要な内容を踏まえていたりして書かれている文章を取り上げ、教師がそれぞれの良い点についてコメントを加えながら紹介することで、その後続く資料をよみとく活動の際に、生徒が多面的・多角的な考察を行うことができるのではないだろうか。